

韓国とまず静かに接することから始めよう

―拉致問題での北朝鮮との交渉に備えるためにも―

ジャーナリスト 松尾文夫



二〇一八年一月月中旬、思い立ってソウルを訪れ、「和解」の道を探ってきた。ちょうど韓国最高裁が日本統治下の元徴用工への賠償を日本企業に命じる判決を出し、さらに韓国政府が二〇一五年の日韓合意に基づき、設立された「和解・癒し財団」の解散方針を発表するなど、日韓関係が「新たな試練」を迎えた時だった

約二〇年ぶりの訪問で一番驚いたのは、高層ビルが林立する街並みの変化のみならず、街のあらゆる標識や広告からまったくといいほど漢字が姿を消し、ハンゲルにとつて代わっていたことである。青瓦台に通じる大通りには、一五世紀にハンゲルを創製したことで知られる世宗大王の巨大な座像が夜も照明付きでそびえていた。一〇年前に建てられたとのことで、新たな韓国のナショナルリズムの原点を見た思いだった。今日本が一番理解していないことのように思えた。

・「ひかり」・「のぞみ」は日本統治時代の急行列車の名前

朝鮮問題の専門家でもない私が、なぜ今韓国との和解というテーマに挑戦するのか。高名な韓国の歴史学者との会食の場でその説明となり、一つの理由が私の人生の最初の記憶が、

父親の任地であった中国から東京で急死した祖父の葬式に出るため、母親と二人で帰国し、帰途は釜山港から汽車に乗り、白い民族服の朝鮮人男性二人と相席で、日本統治下の朝鮮半島を縦断した経験から始まるからだと話した。すると彼は即座に「あなたの乗った朝鮮鉄道の急行列車は『ひかり』『のぞみ』と名付けられていた。その名前を日本が今世界に誇る新幹線で再び平然と使っている事実には、私は戦後の日本が植民地支配を本当に自己批判したのかどうか疑わしく感じる」と述べた。私は一瞬言葉が失った。しかし調べると、本当だった。一九四〇年の「満州朝鮮時刻表」にあった。

漢字や稲作の「渡来」など歴史をさかのぼればさかのぼるほど、切っても切れない関係が明らかになる。一番近い隣国を併合し、「皇民化」した傷跡の深さを改めて見た気持ちがあった。平昌オリンピック以来一年、今韓国の文在寅政権は、南北連結鉄道のための調査を始めるところまできた。南北和解の実績の上で、トランプ米大統領がどこまで金正恩委員長との「フォール・イン・ラブ」の関係が続けるのか、という一点をかたずをのんで見守っている。この文政権がおかれている

厳しい立場を正確に理解することが、今日日本に求められていることだと思う。

安倍首相は二〇一五年の日韓合意後の国会で「元慰安婦へのお詫びの手紙を出すつもりはあるか」との野党質問に対し、「毛頭考えていない」と答え、韓国側の反発をかった。出しておくという選択肢は、間違いないかと思う。

・「不幸な過去」との決別のために花束を

以下、今度のソウル訪問を終えた段階での、私が考える和解のための提案を順不同で三点挙げておく。

①二〇〇九年に第二次レポートを出したままで中断されている日韓双方の歴史学者による歴史共同研究を、出来るだけ速やかに再開する。これは韓国の歴史学者が直接私に語ったことで、「フランスとドイツのように日韓共通歴史教科書を実現することは夢のまた夢かもしれないが、現在のところがた関係が少しでも和らげるために始めてみる努力だと思ふ」とのことだった。トライしてみるべきではないか。

②一九六五年の日韓請求権協定や二〇一五年の日韓合意の国と国との約束は、守られねばならない。しかし、同時に五四年前の政権、四年前の政権の判断と現在の韓国の一般世論、国民感情との間にはっきり格差が存在する現実を認めることも必要だと思われる。つまり「国際法に照らして、あり得ない」といった高飛車に切り捨てる発言は慎むべきではないだろうか。少なくとも、韓国政府内での様々な「対応策」の検討を静かに待つべきではないかというのが、私の提案である。この点ではアメリカ、そして北朝鮮との

関係を絡ませてみると、その重要性がはつきりする。日本では一般に知られてはいないものの、アメリカには一九〇五年のタフト・桂秘密協定によって日本の韓国併合を認めるのと引き換えに、アメリカのフィリピン領有を日本に認めさせる「デイル」をした古傷がある。もしトランプが金正恩との新しい関係の構築に成功すれば、アメリカはこの一四年前の古傷を、日本に先立ち解消することになる。

従って、今拉致問題解決のために金正恩委員長との会談を求める安倍外交にとって、韓国と「ことを構えない」とは一種の至上命令ではないだろうか。北朝鮮がこの日韓の関係の行方を注視していることは間違いない。それに金正恩との接触開始自体、トランプの「協力」を得ている。③新しいビルへの建て替えが進むソウルの日本大使館の前に、一つ道路を隔てて向き合う形でおかれた慰安婦少女像を見つけた。集会が行われるという水曜日ではなかったためか、少女像わきのテント内の学生たちを含め、とげとげしい空気は一切なかった。

私は、この少女像を一番の隣国との「不幸な過去」のシンボルと捉え、それとの決別を果たせることを祈って、さやかな花束を供えてきた。ソウルを訪れる日本人からの花束が途切れなく続けば、というのが私の提案である。「青淵」読者の皆さまはどう考えるか。コメントを頂きたいと思う。

(二〇一八年二月二日記)